ISSN 1344-5561
京都府立大学図書館報
なからぎ
１７２号
２００５年７月

読む本と使う本

教務部長　渡　辺　信一郎

初めて自分で本を買ったのは、小学校三年生の時である。季節は思い出せないが、千本通りに今もある本屋だった。本棚の下の薄暗いところから『王子とあばれ馬』という本をぬき出して、手に取った。以来、小学校に通うあいだ、愛読書となった。王子はアレキサンダー大王のことで、そのほか花まつりの由来や張騫の大旅行の話などが並んでいた。なんども読み返したのは、ハンニバル率いるカルタゴ軍のアルプス越えの話である。象の部隊が雪の山中を行軍するのは勇壮であり、また悲しげでもあった。

蔵書が増えだしたのは大学に入ってからで、しだいに新刊本を買うより古本を買うことのほうが多くなった。熊野神社から寺町までのあいだ、丸太町通りの北側にはかなりの古書店がひしめき、寺町を南下して五条通までの間にも多くの店があった。品切れの専門書は高いから、懐具合との相談になる。やっと金がたまって目あての本を買いにいったら、なくなっていたことも時にあり、悔しい思いをした。こうして三十年も教師をしていると、一部屋に収まりきらないほどの本が集まる。仕事柄、漢籍や和刻本なども多いが、稀覯本を集める趣味はないから、ありふれた本ばかりである。

本棚を一瞥した友人や学生から、きまって聞かれる。「この本、みな読まはったんですか」。父親から聞かれたときには、まいった。若いころは、笑ってお茶を濁すか、「全部は読めません」と答えることが多かった。今は、こう答えることにしている。本には、読む本と使う本とがある。読む本はごく少なく、使う本が大半である。使う本は、辞書や索引などの工具書だけではない。論文を作るときに参照する先行研究であったり、典拠や用例を探すために利用したりする本である。『史記』や『漢書』を読むために、経書や戦国諸子の書を利用する。使う本を自分で加工して、簡単な用例集や字書を作ることもある。課題によっては、使うための本が読む本に変ることもまれにある。

使える本は多ければ多いほどよい。かくて本はどんどんたまり、かわいい本たちの安住の地をめぐって、家庭内争議がたえない。研究室には、蔵書の三分の一ほどを持ち込んでいる。せまりつつある定年後が恐ろしい。

（わたなべ しんいちろう：文学部教授）

ロンドンで何が起こったか？

（追記：この文章の校正中にロンドンで同時爆弾テロが起きました。このようなタイトルで戯文を書いたことに痛心の念を禁じ得ません。）

図書館運営委員　野　口　祐　子

個人的な話で恐縮だが、この数年イギリスBBCテレビのニュースをよく見るようになった。少々露悪趣味の気があるのは承知の上で、BBCを見るようになった経緯をお話しよう。

きっかけは2002年夏のロンドン滞在だった。以前からBBCを衛星放送でやっているのは知っていたが、朝の慌しい時間なので録画しないと見られない。でも私はテレビをあまり見ないので、ビデオは夫の管理下にある。わざわざ録画するのも億劫なので見る機会はなかった。

ところで我が夫は昭和40年代に中高生だった者には珍しく、英語をたっぷり鍛えられていて、アメリカに行っても恐いもの知らずの人間である。議論で一歩も引かず、レストランでも客あしらいが悪いとウェイターに食ってかかる始末。傍で見ていてハラハラするほどの押しの強さであった（まあ多分に性格の反映でもあるのだが）。

ところがである。ロンドンに着いた途端からそれは始まった。滞在するアパートがあるのは、ロンドンでも現在のシティと共に最古から開かれた地域で、その名も'The Borough'（ずばり「ザ・街」）と言う[注1]。仕事の都合でひとり別便で到着し、ヒースロー空港からタクシーに乗った夫は運転手さんに「ロンドンのボロウ駅まで」と告げた。が一向に通じない。「だから地下鉄のボロウですよ。ロンドン橋の下手のサウスウォーク地区にある」などと言いながらアパートの地図を見せたら、なんだバラのことかと了解されたそうな（だから「バラ」と読むんだって言っといたのに。信用しないんだから）。

ロンドン滞在中、もしもこれまでのように「言い負かされへんで」という姿勢で通されては、控えめな態度を上品と見なす土地柄、一層ハラハラしたかもしれないが、出だしから地名でつまずいた夫は、そのあと外では随分大人しかった。しかし相当にこたえたらしい。というのも家族の前では「なんでバラやねん、なんでサザクやねん」としきりにぼやくのである。地名を読み間違えたぐらいでそんなにボヤかなくともよさそうなものだが、しかしたとえば「烏丸丸太町」を「からすまるまるふとるまち」と読んでから訂正されたらちょっと落ち込むことは想像できる。ちなみに彼が運転手さんに告げた'Southwark'もロンドンではサザクとなる。何百年もそう呼ばれてきた由緒ある地名に、この綴りではそうは読めないと言ってケチをつける、このあたりの神経がいまだによく分からない。

おまけに行く先々で、アメリカ西海岸の英語に慣れた耳はロンドンっ子の発音を捉えるのにかなりの抵抗を示したらしい。ロンドンの地理にも英語にも妻より不案内だった夫はあきらめ気味の1週間を過ごした後、帰国した次の日からNHK衛生第1放送の「おはよう世界のトップニュース」を録画して聞き始めた。悔しさをバネに、というのは勉強の動機づけとして結構いけるのである。夫が悔しくて得を

したのはこの私で、その日からBBCニュースは朝晩の楽しみとなった。そのうち贔屓の記者も何人かできて、なかでもイギリス流の皮肉を連発するアンドリュー・マー政治部主任が話す時は、夫が話しかけても制して聞き入るほどである。尤もこれは日本語ニュースと違ってそれほどの集中を要するからでもあるが(注2)。

というわけで、ロンドンで何が起こったか。夫の一念発起が起こった。そのおかげでロンドンで何が起こったか、今では茶の間に座って知ることができる。

それにしてもBBCを見ていると、一口に英語と言ってもいろいろあるものだと思う。世界中でインタビューに答える人たちの英語は千差万別なのである。イギリス国内だって地域、社会階層、年齢によって違う。興奮したサッカーファンが話しているのは十中八九聞き取れない(注3)。そんなにいろいろな風に話すのを聞いていると、きちんと話さなければ恥ずかしいという気負いが薄れてくる。若い頃は間違った文法で話した後で、舌噛んで死んじゃいたいなんて思ったものだ。でももう平気平気。英語を話すには、通じればいいんじゃんと居直るのが一番いいんじゃないだろうか。

ただし居直るのとあきらめるのは別物である。以前より気楽に話せるようになったと感じるのは、BBCのおかげで頭の中に語彙と表現の貯蓄が増えたことが大きい。夫も最近ではイギリス上流階級の発音（気取った物の言いようとしてよく揶揄される）やアイルランド英語（独特の抑揚がある）をタモリばりに、でも正確な英語で真似ては笑わせてくれる。50を過ぎてこの向学心、あっぱれである。

BBCを見るようになって認識を新たにしたことも多い。移民・難民への対応に苦慮する多民族社会イギリスの姿を見た。若者たちの大量飲酒と街路での破壊行動には目をむいてしまう。アフリカ諸国に広がるエイズの深刻さについては定期レポートで教えられる。イギリスがイラク戦争に突入する過程も現在に至る状況もつぶさに追うことができた。BBCは国から予算をもらっている公共放送であるが、政府と対立することも辞さない報道姿勢に感じ入った。世界情勢への目配りと分析が行き届いたBBCニュースを、今では夫も贔屓である。

（注1）「要塞・城」から自治権を与えられた街・都市という意味に転じた。古英語から存在する語で、広くヨーロッパに形を変えて見られる。イングランド北東部のスカーバラ(Scarborough)、スコットランドのエジンバラ（Edinburgh)、ドイツのハンブルク(Hamburg)、フランスのストラスブール(Strasbourg)、そしてアメリカのピッツバーグ（Pittsburgh)など。'Borough'がラテン語の'burgus'(城)から来ているとすれば、ヨーロッパ歴史地図を彷彿とさせる語ではないか。ううむ、英語は奥が深い。詳しくは『ロンドン事典』(大修館)、『英語語源辞典』(研究社)、*The Oxford English Dictionary*、*The Oxford Dictionary of English Etymology* の'borough'の項を御覧下さい。'Southwark'についても『ロンドン事典』を参照下さい。

（注2）この番組ではBBCだけでなく世界各地の放送局のニュースを日本語同時通訳との二カ国語放送で流している。ただし短く編集してあるので、BBCでもいろんなトピックについて知りたい人にはBBCニュースのサイトがおすすめ(http://news.bbc.co.uk/)。これならイラク情勢から芸能ニュースまで、文字情報と音声付き映像でいつでも見られる。キャスターと記者のプロフィールも載っていて、テレビでよく見るあの人の経歴は、なんて俗な興味で覗くのも楽しい。

（注3）イギリス社会と英語の関係については、文学部の西洋文学専攻教員が分担執筆した『講座「マイ・フェア・レディ」---オードリーと学ぼう、英語と英国社会』（米倉綽編著、英潮社）を読むとよく分かりますよ。おススメします!

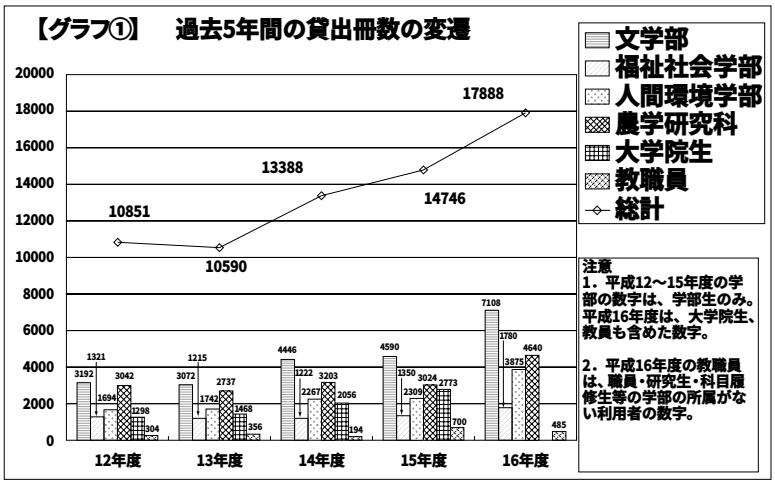
（のぐち　ゆうこ：文学部教授）

平成16年度の図書館利用者サービスをふりかえって

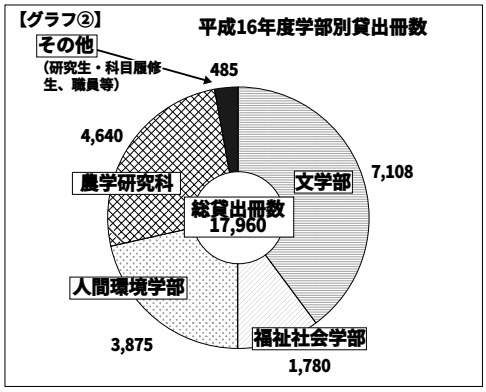
１．貸出

2004年４月から通常貸出の冊数を６冊に増やしたことにより、前年度比1.2倍強の増加となりました。

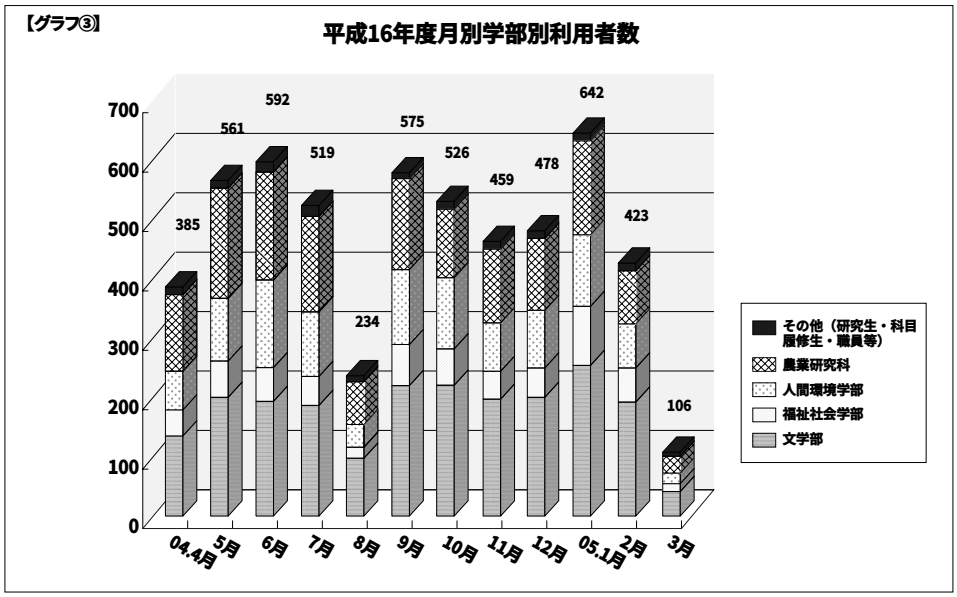
公共図書館の貸出冊数が５冊、10冊の現在、昨年３月までの３冊という貸出冊数は少な過ぎて、特別貸出枠を持っていない学部生は、ずいぶん不便だったと思います。学部生の皆さんが借りたい本をカウンターに持って来られた際に「貸出可能冊数を超えているので選んでください」というやりとりを頻繁にしていたのが、格段に減りました。１回生でも、４冊、５冊と借りる人も多く、中には「６冊借りられますよ」というと、慌ててもう１冊追加する姿もよく見かけます。



過去５年間の貸出冊数の推移を見てみますと（【グラフ①】参照）、平成14年度も前年度と比較し大幅増加しています。この時は、図書館システムの導入により、図書の貸出返却がコンピュータのバーコード処理になったことによるものだと思われます。そのことにより、図書館が気軽に利用できるようになったのではないでしょうか？



次に、学部別の利用状況を見てみることにします。本学の学部は、人文科学系、社会科学系、自然科学系とバラエティに富んでおり、その研究方法もさまざまですので、貸出冊数だけでその利用状況を把握することはできません。が、昨年度（16年度）に関して数字を出してみましたので、参考にしてみてください（【グラフ②】【グラフ③】参照）。

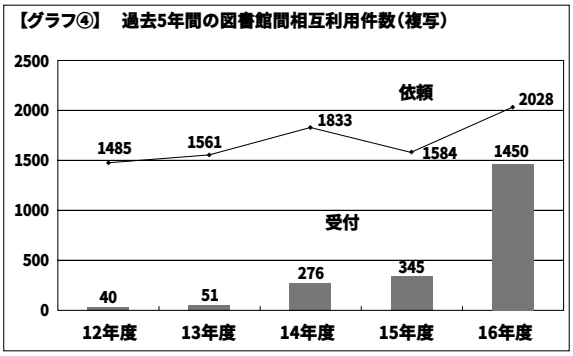


文学・歴史・文化等を研究している文学部は、やはり図書資料が研究の重要なポイントとなることから、図書館で本を借りている割合も高いようです。その次に多くの人が利用しているのは農学部。学部生の利用のみをみると、文学部と大差ありません。その次が、人間環境学部。そして一番貸出が少ないのは、意外にも福祉社会学部という結果がでました。

ちなみに全学生の利用率は70%です。

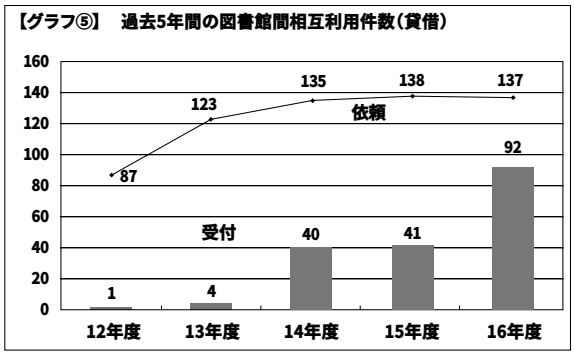
２．大学図書館間相互協力業務

⑴　論文・現物の取り寄せ



平成16年度より、国立情報学研究所が中心になり、論文の複写や本の大学間の取り寄せにかかる経費を相殺する「ILL複写料金等相殺サービス」という制度が導入されたことは、以前本紙でもお知らせしました（2004年10月発行　No.169参照）。そのことにより、本学の業務にも大きな変化が生じました。

他大学から依頼される件数、つまり受付件数が、複写・現物とも前年度から飛躍的に増加したのです。複写が、なんと4.2倍。現物が2.2倍（【グラフ④⑤】参照）。予想をはるかに超える増加でした。今まで、他大学にお願いすることの方が圧倒的に多かったのですが（平成14年度の依頼件数は、受付件数の3.6倍）、この制度への参加によって、相互協力の基本理念にかなり近づきつつあるのでは？と思っています。受付件数の増加は、「相殺」という請求書発行や振込料不要の手間いらずな便利さとあいまって、本学の複写料が他大学に比べて安いということが大きな要因だと思われます。

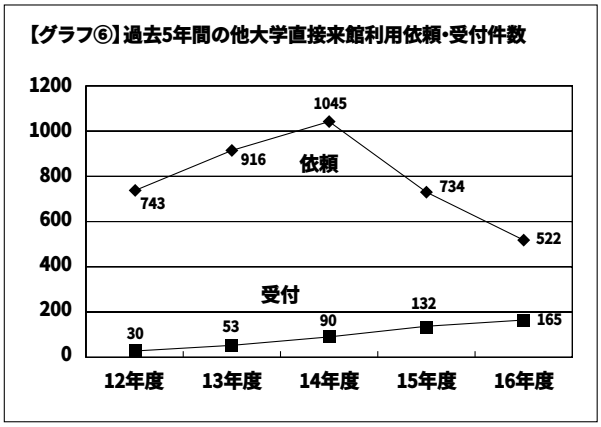


依頼でお世話になる大学に関しては、事務手続き上の事情で今まで国立大学が圧倒的に多かったのですが、この制度により、請求書の発行等を気にしなくてもよいので、いろんな大学に依頼することができるようになりました。また、本庁便を利用するので送料が不要の府立医大へも依頼できるようになり大きな事務の簡素化だと感じます。

今年度の状況ですが、６月15日現在、複写の受付、依頼に関する実際の処理件数はどちらも400件をはるかに超えています。図書の貸出借受も順調に増加しています。この調子で増えていくと、今年度の処理件数は前年度からどのくらい伸びるのか、少々怖いけれど、楽しみです。

⑵　他大学直接来館利用

京都市内には多くの大学があるため、来館しての閲覧も活発に行われています。本学は特に所蔵資料のみでは必要なものが揃わないことが多いことから、他大学利用はひじょうに多くなっています。ここにあがっている数字は、図書館が紹介状を作成したもののみですので、学生証のみで直接来館して利用ができる、京都府立医科大学附属図書館、京都大学附属図書館・農学部図書室を入れるともっともっと多くなります。



統計のとり方が15年度以降、依頼資料数から依頼箇所数に変更されたので、一概には言えませんが、数字のみを見てみますと近年減少傾向にあるようです（【グラフ⑥】参照）。その分、取寄が増えたのでは？と思います。直接来館よりも取寄を利用するというのは、他大学でも近年その傾向が高くなっているようです。

一方、他大学から本学を利用される件数は、年々増加しています。把握しているだけでも他大学をその３倍以上利用させていただいている本学としては、これはうれしいことです。

（閲覧係）

図書館日誌　平成17年度 第１回　図書館運営委員会開催報告

今年度第１回の附属図書館運営委員会が６月22日に合同講義室棟第１会議室で開催されました。

平成16年度事業報告では・当初予算での新規図書購入が厳しい中、追加予算の配当を受け参考図書を重点に選書購入し、若干なりとも資料補充した。・図書館備品として液晶プロジェクターを購入した。・図書館利用統計では、貸出延べ人員が昨年度から約50人の増加であったのに対し、貸出冊数は3,000冊と大幅に増加した。これは貸出制限冊数を３冊から６冊に緩和した効果が現れたものと思われる。・電子ジャーナルの導入については、ワーキンググループを立ち上げ検討を重ねた結果、本年４月から「SpringerLink」を導入、冊子体購入に附属する無料オンラインジャーナルやトライアルとともに図書館ホームページから利用できることなどの報告が行われ、承認されました。

平成17年度事業計画では・図書館の資料購入予算が前年度と同額で、毎年高騰する外国雑誌が新規図書購入費を圧迫し、臨時の予算配当を加えても、新規図書購入は非常に厳しい状況となっている。・図書館所蔵分のデータ遡及入力については昨年度に引き続き業者委託を予定、今後は業者委託ではできない図書の入力を、図書館でしなければならないことが課題として残ることなどの報告が行われ、承認されました。

協議事項では、①平成17年度図書購入執行計画案。②今年度新設された「全学共通教育研究費」の執行について・利用者の利便を図るための図書館閲覧室リニューアル経費・図書館図書・雑誌などの購入費・レファレンス充実のための図書館システム端末の増設・電子ジャーナル購読費を図書館として提出。③外国雑誌の購読タイトルの見直しでは、新規図書購入費確保のため、現在図書館で購入している外国雑誌は全学共通性のあるもの以外は購読を中止することで教員会議に諮ってもらう。④電子ジャーナルの導入拡大を図るため、昨年度に引き続きワーキンググループを継続するなどが提案。いくつかの質疑応答の後、原案どおり承認されました。

図書館運営委員会委員名簿
（平成17年４月１日現在）

附属図書館	館長（人間環境学部教授）	春山　洋一	委員長
文学部	教授 助教授 助教授	野口　祐子 菱田　哲郎 山口美知代	W・G
福祉社会学部	教授 助教授 助教授	津崎　哲雄 武田　公子 服部　敬子	W・G
人間環境学部	教授 助教授 講師	佐藤　健司 河西　立雄 ﾘﾝﾄｯﾙｵﾄ正美	W・G
農学研究科	教授 助教授 講師	井上　雅好 矢内　純太 辻山　彰一	W・G
附属図書館	事務長 係長	梅村　健一 久保　直弘	

（図書館のＷ・Ｇは館長、職員３名）

２階閲覧室「府大図書コーナー」のご案内

平成16年度にも府大関係の方々から貴重な資料を59点御寄贈いただき一層充実いたしました。詳細はHP上にリストを掲載しています。なお、本誌３頁、野口先生の文中で紹介されました『講座「マイ・フェア・レディ」：オードリーと学ぼう、英語と英国社会』も同コーナーに配架していますのでどうぞご覧下さい。

カレンダー

2005年7月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

【～7/22(金) 通常貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限：２週間以内）】
【７/25(月)～9/27(火)夏休み長期貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限：10/11(火)）】
【７/18(月)〈海の日〉】

2005年8月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31			

8/15(月)～9/2(金) 閲覧室等休室

【～8/31(水)夏休み長期貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限：～10/11(火)）】
【8/15(月)～9/2(金)２階閲覧室（含書庫）を休室（蔵書点検のため）この間、**図書の返却**は図書館１階西側職員通用口横の**[図書返却ポスト]**をご利用ください】

2005年9月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

【～9/27(火)夏休み長期貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限：～10/11(火)）】
【9/19(月)〈敬老の日〉】【9/23(金)〈秋分の日〉】
【9/28(水)～ 通常貸出実施
（貸出冊数６冊以内、返却期限：２週間以内）】

開館時間等					
通常開館	９：００－２０：００				
	夏期休業	8/8～9/30	9：00－16：45	夏期休業	8/8～9/30	9：00－16：45
休館日	土・日・祝祭日				

なからぎ京都府立大学図書館報　172号2005（平成17）年７月発行　編集発行人：春山洋一
発行所：京都府立大学附属図書館　〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町　TEL 075（703）5129
FAX 075（703）5192　ホームページhttp://www.kpu.ac.jp/toshokan/toshokan.html